

史料紹介

古絵図等に見える鹿児島城

三木 靖¹⁾

1) 891-0197 鹿児島市坂之上 8-34-1 鹿児島国際大学

1. 鹿児島城の全体像

鹿児島藩の本城は、山城と屋形からできています。

まず山城について、基本的には、防衛のために使う崖や急傾斜地等と、それに守られた曲輪等とからなる城と捉えることができます。従って曲輪だけではなく、ちょっと見は藪や森で崖面・斜面に過ぎないのですが、実は山城の主要な要素です。しかし山城跡は藪や森に見え、城らしさを感じられないことがあります。

一方、屋形は平地を使って、そこに防衛施設を構えるので、その施設や遺構が伝存されていて、城らしさを感じることができます。

藩政期の城の多くは、山城と屋形とを離れた場所にしましたが、鹿児島城は山城と屋形を一体化しています。山城は中世に盛んでしたし、藩政期の城は屋形を主としたものが多く、見た目も山城は城とは思われていないこともあって、山城と屋形の一体化した城は、全体としては城とみなされず、屋形のみが城とされることがしばしばあります。また山城が中世起源のため、山城と屋形が一体化した城は、藩政期の城としては軽いもの、古めいたものと見られがちです。鹿児島城の場合もそういう誤解が結構見られます。

そこで鹿児島城を、先行研究を見直し、総合的に捉えなおしたのが、図1の「鹿児島城の模式図」です。それは、現在の地形の観察、関連する絵図等の史料、諸種の資料により、今まで見落とされていた鹿児島城の実態とその役割りを解明しようとしているのです。

図1は、図の上の①～②～③で囲んだところが山城域で、最長部分で大略南北1km、東西300mあります。山城なので、前記の通りその面積の大部分は、本丸④、二之丸⑤の様な曲輪ではなく、崖や傾斜地で、森としか見えません。その城界は、城域内の屋形続きの丘の麓（平地地域との接線、⑨～⑪～⑫～⑬）や、丘の縁辺の最下段部（谷底の中央線、①と②の半ば辺から③）にしてあります。これは山城の本来の性格をもとに描いたもので、既にいくつかの研

究書等や『鹿児島（鶴丸）城跡保存活用計画』（2016年3月刊）もこれと同様でした。

ところで山城の常なのですが、谷底で、河川などの明瞭な防衛の役割を果たすものがない場合、防衛のために、実際は城からみて外側の防衛線と思われる、高い地点（尾根筋）を使うことがあります。鹿児島城の場合、1772・安永5年成立の『通昭録』（鹿児島県資料集（52）『通昭録（一）』、鹿児島県立図書館2013年刊）によれば、1756・宝暦6年の幕府目付の来鹿の際の、藩側の回答集「鑒察使答問抄」では、「御曲輪内上屋敷之事」として「岩崎へ41ヶ所」と谷底の中央線を挟むと思われる侍屋敷をあげていて、外側の防衛線となる高い地点（城ヶ谷との堺となる尾根筋）を城界としていたことが明らかです。ですから、図1の山城域の城界のライン（①と②の半ば辺から③）は、山城域を最も限定的に考えたもので、丘の縁辺の最下段部については更に検討されなければなりません。

そして図1の下が屋形とその周辺域で、前記した山城の北半分域で、北外堀（⑭）と南外堀（⑦～⑧～⑩～⑬～⑮～⑯）で囲まれた、鹿児島湾に至るまでを含み、大略南北700m、東西500mあります。現在一般的に鹿児島城の範囲とされているのは内堀（⑰～⑱～⑲～⑳）で囲まれた地域ですが、ここでは、外堀までを鹿児島城の全体と見ています。

2. 前期の鹿児島城

(1) 1670・寛文10年作「鹿児島城及び町割図」（図2）

鹿児島城の全体像を明らかにするために、今回は絵図類を取りあげます。その際、地元の鹿児島県立図書館が所蔵する絵図を主とし、作成年次順に検討していきます。最初には五味克夫氏が1973年『鹿大史学21号』で紹介された「鹿児島城及び町割図」と題された鹿児島城と鹿児島城下を描いた彩色図を見ていきます。それは当図が、1670・寛文10年作成とされているからで、これを図2とします。

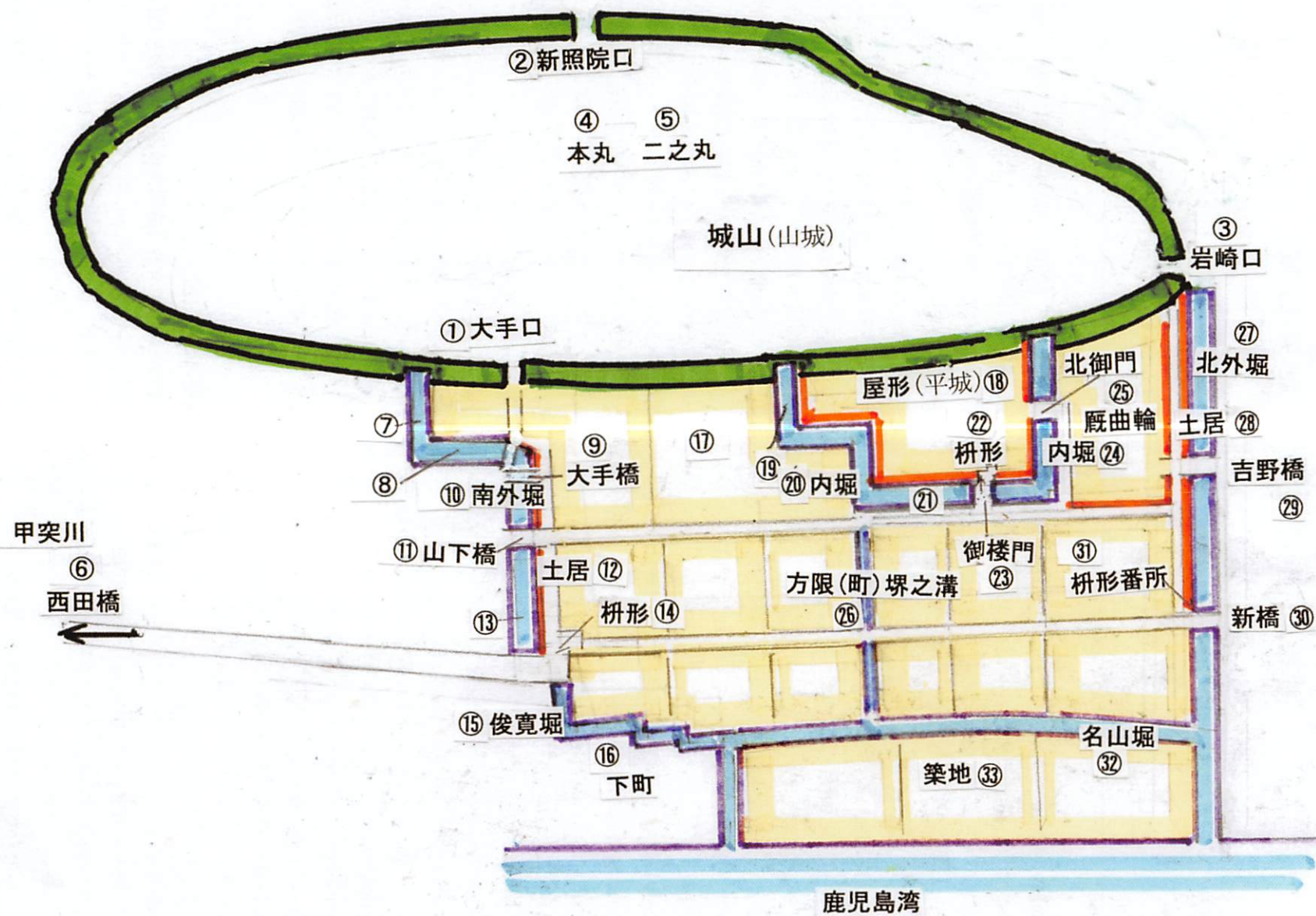


図1 鹿児島城の模式図 2017.2 作 山城：緑 屋形と周辺：黄色



図2 「鹿児島城及び町割図」(1670・寛文10年作)

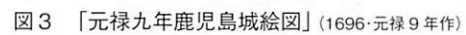
ちなみに鹿児島城は1601・慶長6年普請開始ですから、この図でも築城からは69年も経った後に描かれたもので、創立期を含む前期の鹿児島城を示しているとは言えません。鹿児島城の前期の絵図は今後の調査を待たねばならないので、中期に描かれた当図で前期のことを補いたと思います。当図は、成作意図が明確でないのが気にはなりますが、それでも鹿児島城の前期・中期の全体像の検討には役立つと思われます。

さて当図は、上を北とし、下田村等を載せ、下を南とし、桜島を載せ、左を西とし、西田村、坂本村等を載せ、右を東とし、実方等を載せ、中央に鹿児島城を、その下に屋形とその周囲の屋敷地を載せています。以下この図2の方位は、北を東とし、実際とは異なっていますが、図面に沿っ

ての検討ですので、図に書かれている方位を尊重していきます。そして当図は山、海川、侍屋敷、町、田畠、道を5色で書いていて、分類上は6つになりますが、侍屋敷は白色ですから、着色されているのは5つです。

図2では、鹿児島城の山中の平坦地が山城域の中心とされています。図中には南北6町余、東西5町と書かれていて、東端、北端、西端にそれぞれ番所、中央に武道具蔵と書かれた建物が描かれ、南側に前記4ヶ所の建物より大きな建物が描かれています。平坦地は、中央東側に山が少々入り込んでいますが、かなりの広さを感じさせます。そして平坦地を囲む山は、険しい崖となっています。

平坦地の北側は何重にも山が重なっていて、「この山野続き南北に20町余、高さは城山並み、左右の谷は險阻」



とし、「この山野と城山の間の尾続きには堀切あり」として、平坦地が、地形を生かした防衛性を頼みにしていることが丁寧に描かれています。堀切の深さは10間程とされていますが、絵図では山の陰になっていてその詳しい様子は分りません。

その平坦地には下の屋形域から山道があり、更にその東側の岩崎から登る山道、西側の大手門の描かれた谷から登る山道があり、もう一つ、西側から、北にある「今はない」と書かれた門が描かれていて、そこを通る山道があります。以上から鹿児島城の山城域の曲輪、すなわち平坦地は、記載の数値600m余×500m余にふさわしい面積がある様の感じられる描写になっています。

更に当図は、屋形とその周辺の屋敷等域についても、山城域に負けず劣らず広々と描いています。山城の山麓の南側中央に、右に「大隅守殿居宅」、左に「薩摩守殿居宅」と前記5色と別の色で書かれた四角形の屋敷地が描かれています。絵図の成立とされる年次を考慮すると、大隅守は第2代藩主久光のことであり、薩摩守は久光の嫡男で、後に第3代藩主になる綱貫のことです。この様に屋形は藩主とその嫡男の拠点となっていたと思われます。しかし当時の通例で、この屋形の核心となる部分については、一切の描写はありません。

大隅守の屋形の南前は水堀（水濠）と石垣、石垣には塀が載り、西側には櫓が載り、東側にも多門櫓相当（石垣沿いの施設の建物区分は仮称です）が載り、水堀には橋が架かっています。水堀は東西方向のみで、居宅の東端側には水堀は無く、通路になっていて、その通路沿いは敷地の東端になり、石垣と長屋が描かれています。大隅守の屋形前の水堀は、そのまま西側に伸びて薩摩守の屋形の東側半分近くまで続いていて、水堀には石垣と塀が付いています。その西側は長屋になっています。両屋形の境は一本の線であり、両者は一体となっていた様です。薩摩守の屋形の西端側も通路で仕切られているばかりです。大隅守の屋形の東側は通路を挟んで、護摩之祈祷所と書かれた区画で、山麓には床のあるきちんとした建物が描かれており、更にこの区画の南端には石垣と塀が描かれています。ちなみに石垣は西側で北に直角に曲がり、再度曲がって西側に続き、通路を渡って、大隅守の屋形の石垣へと続いています。この護摩之祈祷所と書かれた区画の東側は、南北に直線の水堀が海に続いています。これに対し、薩摩守の屋形の西側の区画の北端からは大手口に繋がる通路が出ています。また薩摩守の屋形の西側の区画の西端には、門が描かれ、そ

の西側の南半分から南には広い通路があり、その西側には植栽された土居が付いています。その土居は、南側の区画の西側で、鍵形になって中断し、更にその南側の区画の西側に続いています。土居が中断した北側の屋敷の区画は凹んでいます。

上記の屋形とその周辺域全体を更に見ると、四角形の屋敷の区画ばかりで、屋形周辺だけでなく、東は大乗院の置かれた山際まで、西は浅き砂川まで、屋形周辺と全く同様の格子状の道路が十字に交わり、格子状に並ぶ屋敷区画が広がっています。例外は屋形の南に「犬追物馬場」・「築島」と、西の土居沿いの「琉球証人屋敷」とが記されていることだけです。なお、屋敷区画の南東側には上町地区の町屋域があり、南側の海沿いに下町地区の町屋域があり、西側の川を越えた所に通路を挟んだ町屋域が、東郷筋と書かれた道沿いにL字形の町屋域がありました。

以上を図1の模式図と対応させると、鹿児島城と書かれた場所は、城山とも書かれていて、模式図の山城域④、⑤に当り、大手門は①で、岩崎は②で、左手の奥の門は③です。山城域は、地形図等から判断して、実際より大きく描かれていると見えますが、その内容は荒唐無稽ではなく、実状を誇張したか、山城の理想の姿に近づけた表現ではないかと思われます。

屋形とその周囲の屋敷域について見ると、居宅と書かれた場所は、模式図の屋形に当ります。すなわち大隅守居宅が模式図の⑬、薩摩守居宅が⑭、描かれていた水堀は⑮、水堀に架かる橋は⑯で、護摩之祈祷所は⑰、その右手の山際から海に通じた水堀は⑱です。薩摩守居宅の左手の屋敷の区画の左の広い通路に沿って植栽のある土居⑲があり、鍵形になって中断した場所と、その右手の屋敷区画の凹みとは、枳形⑲の存在に影響されています。

図2の、屋形を含む平地全域に広がった格子状の屋敷区画の描写は、鹿児島城の屋形周辺域を、この平地全体に拡大したいという意図を反映したものと思われます。しかし、模式図の⑲と⑲の外側は、実際には通路の方位がその内側とは異なっていて、図2にみられる、格子状の画一的屋敷区画とはなっていません。これは島津藩の首脳陣が、新たな築城に際し、その周囲を広く、屋形並にしようとしたのですが、既に町人商人が建設した町屋等を、島津藩の都合で屋形並にすることを避けて、格子状の画一的屋敷の拡大を抑えたためと思われます。それにしても、内堀は兎に角、⑲と⑲の両外堀、なかでも北外堀は創立期の狙い通りに実現したものと思われ、これだけでも壮大な構築物を実現し

たと見ていいと思われます。

ただ当図は、城下の周りの村名を誤り、屋形を、幕府が居所に変えて表記させた「居宅」とし、町屋域を4つ描き、用紙に添付の跡が残るなど気になる所があり、作成時期や、描写の信憑性は、更なる検討が必要です。

3. 中期の鹿児島城

(1) 1696・元禄9年作「元禄九年鹿児島城絵図控図」(図3)

次に1696・元禄9年、鹿児島大火で焼失した鹿児島城を修理したいと幕府に願った「元禄九年鹿児島城絵図控え図」を取りあげます。これを図3とします。当図は国宝島津家文書に含まれ、現在は東京大学史料編纂所が所蔵しています。

当図は1696・元禄9年5月13日当時、第3代藩主の島津綱貴が、鹿児島城下の町屋からの出火で焼失した居所、櫓、堀、門、橋を絵図で示して、作事によってもとに復したいと述べたもので、石垣についても、所々焼け崩れたので元の様に修理したいと、幕府に願い出たことをも述べたうえ、城の焼失状況等、絵図を添えて修理を願った実状、絵図の作成事情、そして幕府により1696・元禄9年5月23日に許可されたことへの感謝を記したなかで作成されました。

特に火災による被害とその修理に関し、島津藩は詳しい書面2通と絵図2枚を作り、絵図1枚は江戸芝屋敷の評定所に、1枚は鹿児島の国元に収め置いたとしています。これは1689・元禄2年御門と橋について伺った際、差出した絵図を今後相違なく置き置く様に仰せられたので、それに従って作成され、これから絵図を差し出す際には、間違いない様にとも書き加えられています。

当図は、図2から26年後に描かれたもので、上半分に樹木の繁茂した山が描かれ、図の下半分には、格子状に、縦横に通路が交差し、通路に囲まれた11区画が整然と並び、その周りを水濠や海が取り囲み、中央の上段部に、山を背に、左右と下の三面を石垣と水堀に囲まれた区画が描かれています。

そこでこれと図1の模式図とを対応させると、本丸は④、二丸は⑤で、大手口は①、新照院口は②、岩崎口は③になり、緑で囲まれた森が山城域です。その森のなかと周辺に侍屋敷の文字が5つ書かれています。そのうち大手口の直ぐ上の2つと、岩崎口の左上の2つは、『通昭録』の「御曲輪内土屋敷」に書かれた「大手口6ヶ所、岩崎41ヶ所」に当たっています（岩崎41ヶ所については、既に説明

して重複になります）が、新照院口の左の侍屋敷は「御曲輪」内にはしていません。この新照院では、侍屋敷の更に左に見える3つの「同」も、新照院の侍屋敷と同種の屋敷ですが、同じく「御曲輪」内ではなく、新照院の侍屋敷は全部が、山城以外でした。

山城と海岸との間は屋形とその周辺域で、図1の模式図と対応させると、居所は⑧、修理大夫居所は⑦です。この居所は第3代藩主綱貴の本拠で、修理大夫居所は後に4代藩主となる吉貴の本拠でした。この居所は、後に本丸と、修理大夫居所は後に二之丸と定められるのですが、この時点では本丸、二之丸は、山城頂上部を指していて、実際に藩主や嫡男が使っていた場所を居所としていて、本丸、二之丸との表現を避けています。そして城の正面入口を表す大手の名称も、前記の様に山城への入口に付けられていて、屋形向けには御楼門⑨が正門でしたが、大手門の名称は使われていません。

更に図1の模式図と対応させると、図3では内堀が石垣を伴い⑩、⑪、⑫、⑬と屋形を囲んでいます。このうち、⑩は、⑪から南に折れ、更に山まで続くのですが、図に書き込まれた朱字による、長さの数値と比べ、また模式図と比べても、南に折れた部分が短く描かれています。更に、内堀⑩と⑪との曲がり角では⑩をまたぎ、⑪に入り込み、⑩の南端を覆う構造物が見られます。⑪の東端には、長屋や門、堀が描かれ、内堀⑪には方限(町)堺の溝⑭と御楼門⑨と北御門が描かれています。⑮厩曲輪の東端は低い石垣が囲み、北側、南側にも⑮の堀幅分は石垣が続いています。

南外堀は⑧、⑩、⑬、⑮が描かれ、関連して枡形跡⑯が描かれています。大手橋⑨、山下橋⑪は描かれていません。北外堀⑫は、そこに架かった吉野橋⑲、新橋⑳が描かれており、河口の名山堀㉔や築島㉕も描かれています。なお南外堀の南側㉗や、俊寛堀⑮から名山堀㉔に折れ曲がって通じた濠も描かれていません。左側下の下町㉖関連については「町」と書かれているばかりで、侍屋敷殿との境が描かれていません。そこで俊寛堀付近で城堺が予想される場所に、破線を入れておきました。

南北の外堀に囲まれた屋形とその周辺では、格子状に交差する通路が、きっちりと明瞭に描かれていて、通路に囲まれた区画も丁寧に描かれています。また南外堀の南側には、北側の通路と主軸の方向が異なった通路と、侍屋敷の文字が書かれています。一方、北外堀の北側には、格子状の通路と、その通路に囲まれた区画が描かれ、侍屋敷の文

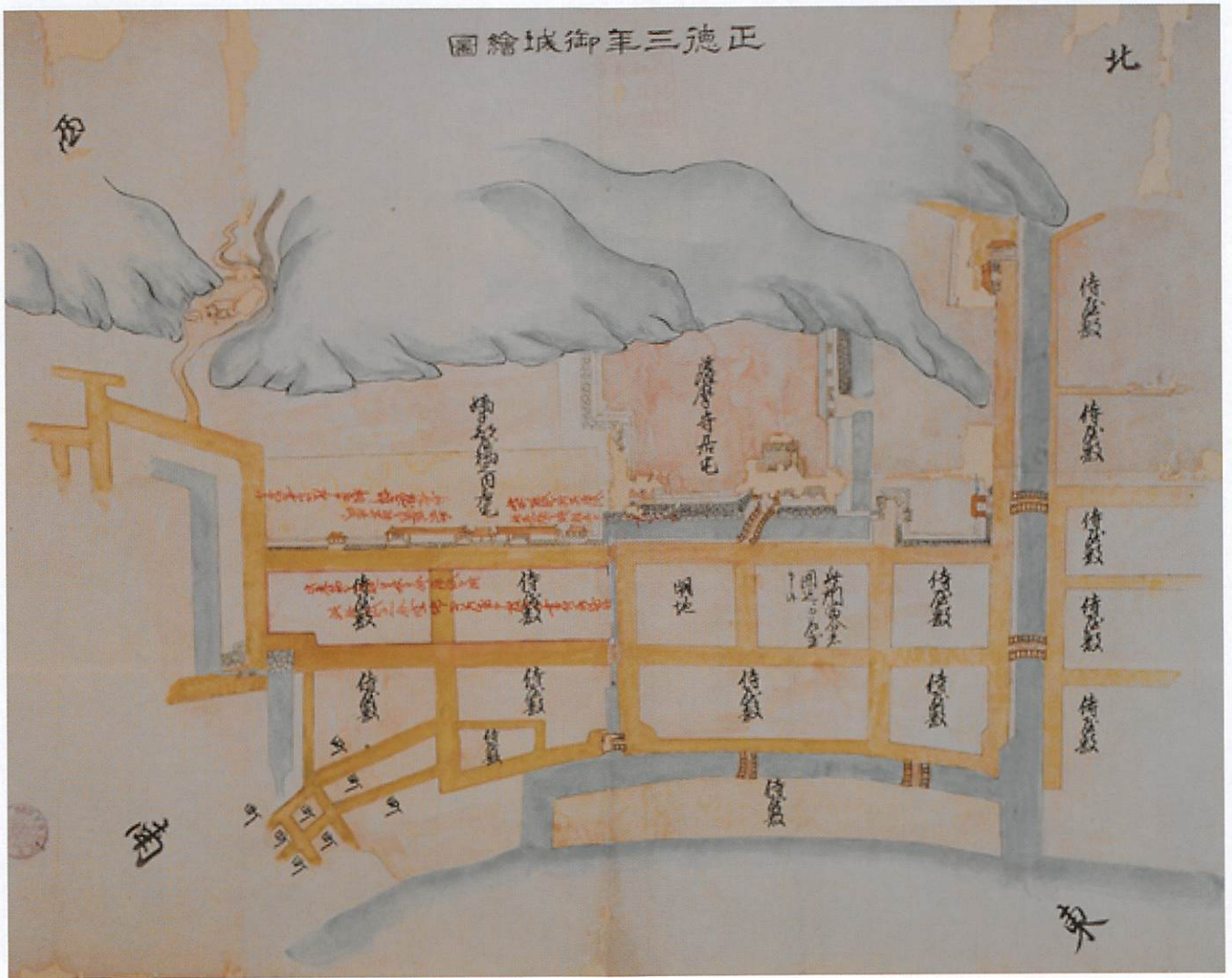


図4 「正徳三年鹿児島城下絵図」(1713・正徳3年作)

字も書かれています。

以上図3は、上半分は鳥瞰図的に斜め上から眺め、下半分は俯瞰図的に真上から見下ろした構図で、鹿児島城として、山城域と屋形域とその周辺域とを合わせて捉えていたことが一目で分かる様になっています。そして、山城域の本丸、二之丸は、二重丸で囲まれていて、実際には建物が建っていないと思われる描き方になっています。一方、現実には藩主と嫡男が使っている屋形とその周囲は、居所と称されています。通常は藩主と嫡男の住んでいる場所は曲輪で、本丸、二之丸と呼称するのですが、そうしていません。当図は、火災によって焼失した部分を確定する目的で作成され、実際焼失したのは屋形とその周辺ですので、そこを本丸、二之丸と呼称してもおかしくないのですが、それを避けているのです。これは大手門についても同様です。この様に当図は山城域を屋形域より重視しているのです。

(2) 1713・正徳3年作「正徳三年鹿児島城下絵図」(図4)

次に1713・正徳3年屋形の南西部⑬の改修等を願って作成された「正徳三年鹿児島城下絵図」を取りあげます。これを図4とします。当図の原図は史料編纂所の所蔵で、片山信太郎氏の写したものが鹿児島県立図書館の所蔵となっているので、それを見ていきます。当図は、鹿児島城の近辺で出火が続くので、その対策をするために屋形の⑬、すなわち当時は御下屋敷と言うのが普通だった部分の南西端の長屋を塀に改め、その前面の待屋敷を火除けの明地にすることにしました。そのために幕府に提出した控え図で、図3作成から17年後に作成されたものです。当図は、前回からそれ程時間は経過していませんし、対象を屋形とその周辺と限っていますので、山城関連では大手口と岩崎口しか扱っていません。

とは言え大手口では番所とみられる建物とその前に小屋、奥に柵と思われるものが描かれ、図3の大手門と、そ

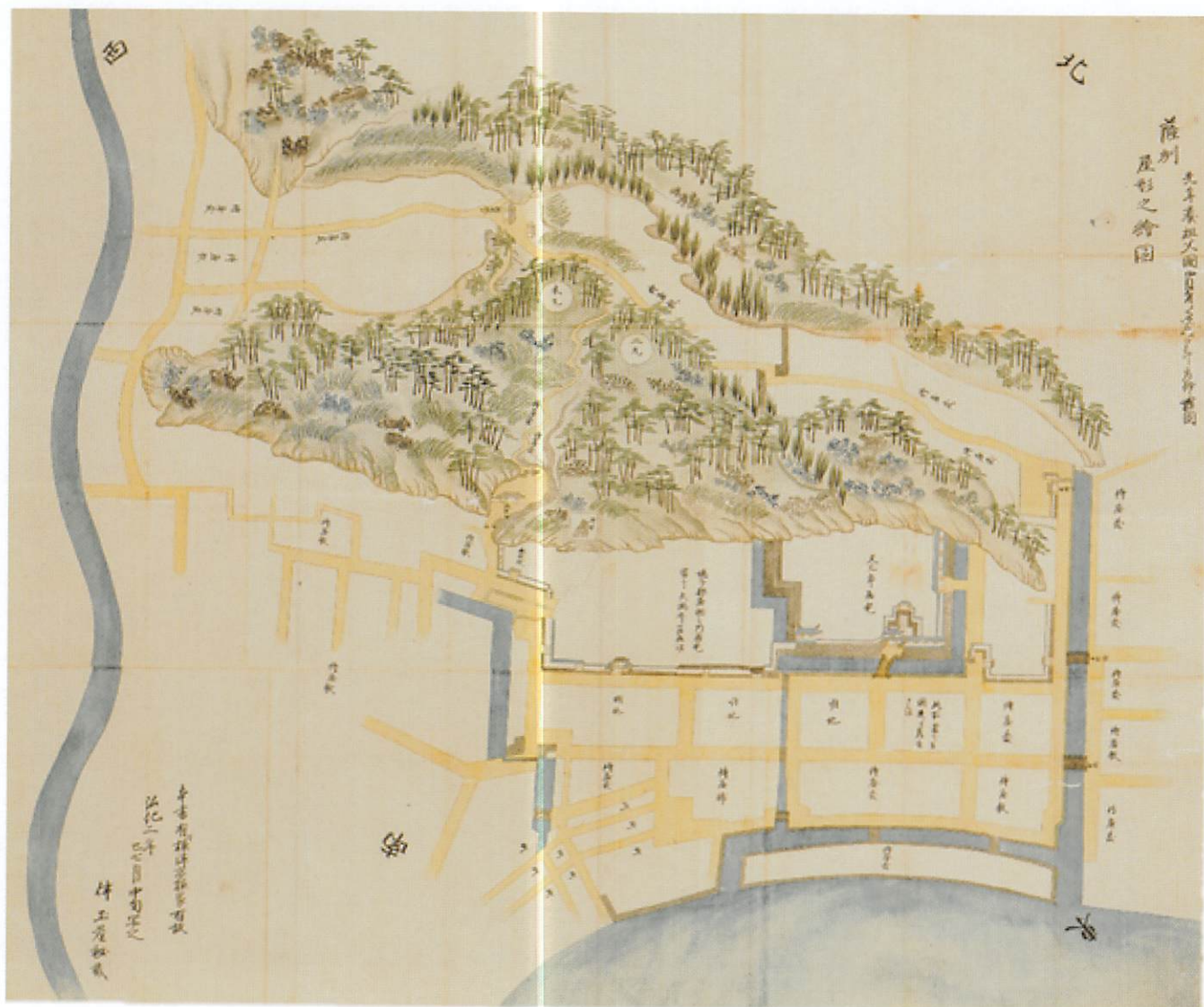


図5 「薩州屋形之絵図・宝暦六年鹿児島城下絵図」(1756・宝暦6年作)

の後ろに番所が描かれていたのとは若干異なっています。なお大手口横から山手にかけて小水路が描かれているのは図3とほぼ同様です。また岩崎口は桁形様の大きい門と番所様の建物が描かれていて、図3の石垣で囲まれた施設の、上空からの俯瞰図的な描写とはかなり異なっています。

屋形とその周辺域の描き方も、絵図の損傷で分り難い所も少々ありますが、基本的には図3に類似しています。屋形⑮については、内堀⑮、⑯、⑰、⑱と桁形⑲と御楼門⑳もほぼ同一ですし、御下屋敷と通称されていた屋形㉑も、形態はほぼ同一です。南外堀や、北外堀関連も全く同一です。異なるのは、屋形関連の名称です。第3図では⑮は「居所」となっており、その屋形の主は、第3代藩主綱貴でしたが、当図では「薩摩守居宅」となり、その屋形の主は、第4代藩主吉貴に替わりしました。そして図3では「居所」と書きましたが、幕府の指導で当図4では「居宅」と書く

ことになりました。また御下屋敷とされていた㉑は、図3では「修理太夫居所」で、第4代藩主になる吉貴が主でしたが、今回は「嫡子部屋栖内居宅」で、第5代藩主になる継豊に替わりしました。

屋形前の北東の区画は、「当分は、囲迄にて差置申し候」と、建物を建てず、その南西隣は、17年前に引き続き「明地」ですが、更にその南西隣は連続して、空き地に変更したいと貼紙を付けて幕府に申請しており、屋形の御下屋敷すなわち「嫡子部屋栖之内居宅」の区画は、南東端の通路沿いの長屋を塀に変更したいと貼紙を付けて幕府に申請しました。この囲いだけにする区画と、貼紙の様にする区画とができあがると、屋形前から侍屋敷は無くなり、全面建物のない空き地となり、㉑の御下屋敷すなわち嫡子の居宅の長屋を塀に替えれば、屋形域は火災除けの空き地で完全に守られます。屋形とその周辺域の区画は変えず、そ



図6 「文政五年鹿児島城絵図」(1822・文政5年作)

の使い方を変えようとしたのです。

(3) 1756・宝暦6年作「薩州屋形之絵図、宝暦六年鹿児島城下図控図」(図5)

次は1756・宝暦6年幕府向けに作成された「宝暦六年鹿児島城下絵図控え図」を取りあげます。これを図5とします。原図は東京大学史料編纂所にあり、「薩州屋形之絵図」の名称で1845・弘化2年根津の京極家で写され、鹿児島県立図書館にはその複写図がありますから、それを見ていきます。念のために触れておけば、既に2回引用した『通昭録』にある「監察使答問抄上」は、この年に幕府目付京極高主と青山成親が来鹿するのに備えたものでした。

この図は基本的に図3をもとにして山城域を描き、屋形域の内堀、南外堀、北外堀、道路、屋敷の区画を描きまし

た。それを図1の模式図と対応させると、山城域では①、②、③、④、⑤は全く同一です。屋形域でも描かれた⑬、⑭、⑮、⑯、⑰、⑱、⑲、⑳、㉑、㉒、㉓、㉔は図3、4とほぼ同一ですが、⑰の南端には堀が建てられ、山麓には「南泉院」が置かれ、その門前には土居様の施設等が造られているようで、この点は図3、4とは異なっています。

屋形の記載を見ると、⑮は「又三郎居宅」となっています。又三郎は、第8代藩主重豪の通称です。この図の作成時には藩主でした。もう一つの⑰は、「嫡子部屋栖之内居宅 当分大隅守罷居候」となっています。大隅守は、第5代藩主だった継豊の受領名です。当時の藩主重豪は前年1755・宝暦5年11歳で家督を継いだのですが、若年のために、系譜上で曾祖父にあたる継豊が後見となっています。そのため⑰は、元来嫡子のための施設でしたが、当分は重豪の

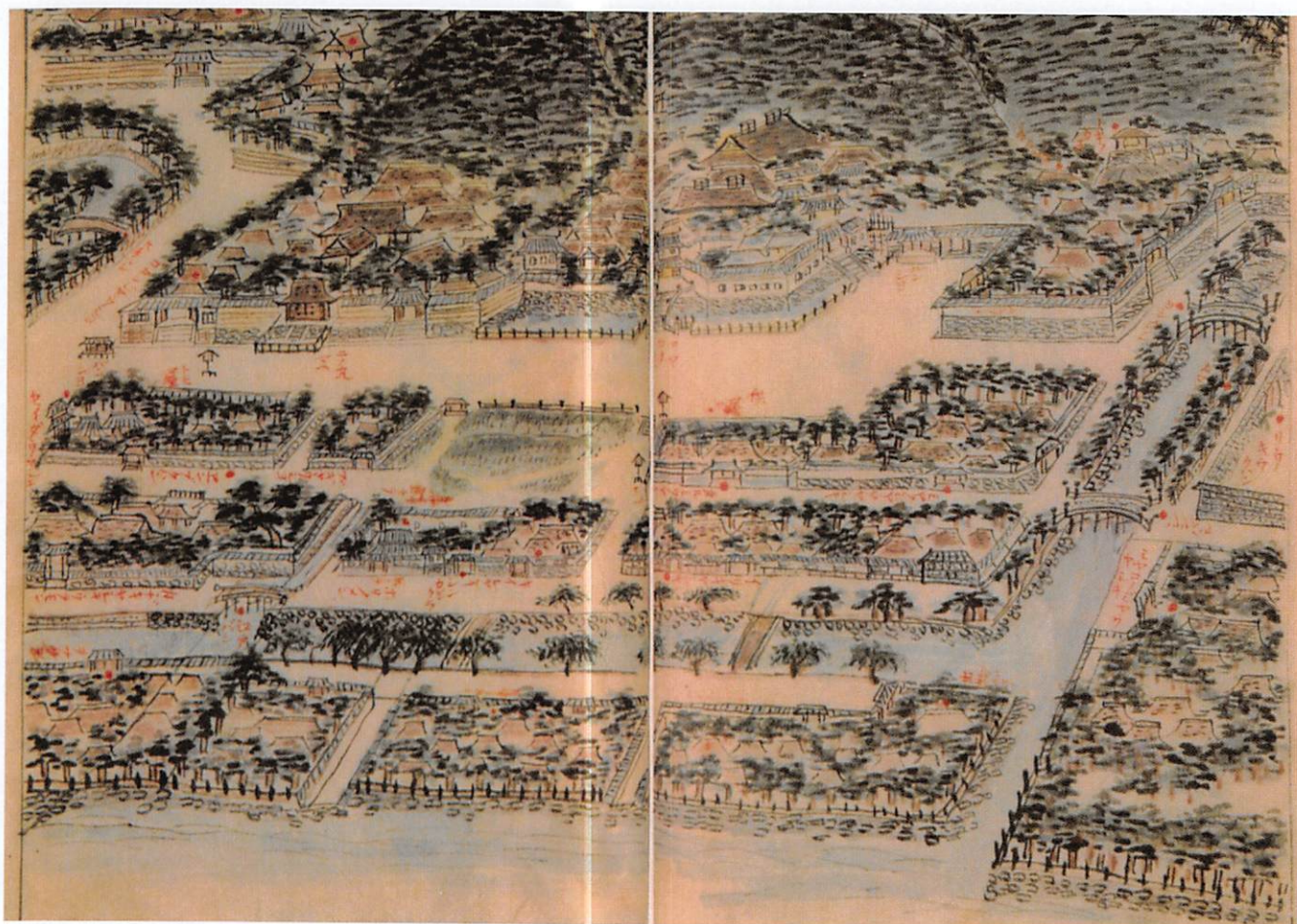


図7 高木善助「城山南面屋形前之図」(『紀行篇画帖』1828・文政11年～1838・天保9年来鹿)

後見人の継豊が主となったのです。ちなみに継豊は後見役を4年勤め1760・宝暦10年に没しました。

さて屋形⑬、⑭の前の屋敷の区画について見ると、43年前の図4で、「当分は、囲迄にて差置申し候」と建物を建てず、その南西隣は、以前から引き続き火除けの「明地」でした。更にその隣は⑬の前で、侍屋敷が2区画あったのですが、1713・正徳3年に「明地」にしたいと申請した場所で、この図では2区画とも空き地になっています。これで、屋形⑬、⑭の前の区画は4区画全部から建物がなくなった状態になりました。

当図は、以上の説明で分かるように1696・元禄9年の鹿児島城図に見える城の構成が、66年経過してもそのままです。これは、島津藩が、鹿児島城について当初以来の考えを変えていないことが基礎となっています。

(4) 1822・文政5年作「文政五年鹿児島城絵図」(図6)

次は1822・文政5年に作成された「文政五年鹿児島城絵図」を取りあげます。これを図6とします。当図は五味克夫氏「玉里文庫本「文政五年鹿児島城絵図」について」と

して『鹿大史学第21号』(1973年刊)に発表されたものです。執筆者は島津久光ですが、現存しているのは、1916・大正5年に複製されたもので、鹿児島大学附属図書館「玉里文庫」に収められています。説明は鹿児島地区の東福寺城、鹿児島清水城、鹿児島内城、上山城等の城を主にしつつ有力寺社、上位身分の家臣屋敷、通路、山・川に及び、鹿児島の史跡の説明をしています。鹿児島の歴史を述べようとしたので、絵図は、南は鹿児島城から、北は東福寺城までに及んでいます。そのうち、鹿児島城については、山城を描き、大手から谷を通り、山野間を抜けて新照院に至る山道を描き、屋形を内堀で囲んでいます。更に北外堀を太目に取りあげ、屋形前の格子状の屋敷区画を築地まで描いています。これを図1の模式図と対応させれば、①、②、③を描き、山城は、大手から新照院、岩崎の範囲を中央に据え、城ヶ谷の尾根を北外堀から新照院まで直線的に描いて、城山の西側に広い土地があると思わせています。屋形⑮を山城の麓に置き、内堀⑳、㉑、㉒と御楼門㉑と北御門とその橋、更に方限堀之溝と、内堀に沿い、櫓を載せた石垣とを描いています。



図8 「天保十四年鹿児島城下絵図」(1843・天保14年作, 1913・大正2年山下兼秀写)

これに比べ屋形⑰をはじめ、南外堀は殆ど空白ですが、南泉院とその前方付近には、南外堀⑧とその周囲の土居と思われる広幅の筋、大手口への入口を描いています。その周辺は作事にかかろうとしたが、そのままという感じです。他方、厩曲輪⑮は、山麓を書き込んでいます。北外堀は、土居⑳相当の広幅の道、吉野橋㉑、新橋㉒を描いています。更に滑川も具体的に書かれています。この点は、図2から図4とは著しく異なっています。そこで前記五味克夫氏の論稿は、当図を方限堀之溝から上方限を主に描いたとして、「鹿児島城下の上町方面を画いたもの」と表現しています。それにしても、これまでに描かれた鹿児島城下図とは異質の作品です。

4. 後期の鹿児島城

(1) 1828・文政11年～1838・天保9年作高木善助「城山南面屋形前之図」(図7)

次は高木善助が、1828・文政11年～1838・天保9年に来鹿しその際に描いた絵図を『紀行篇画帖』に編集しました。そのなかにある「城山南面屋形前之図」を取りあげます。これを図7とします。『紀行篇画帖』は鹿児島県立図書館

等に所蔵されており、その複写図も多種あります。最近では東條弘氏編の『大阪商人旅日記』(鹿児島学術文化出版、2016年刊)に掲載されています。

著者高木善助は大坂商人で、島津藩の天保の改革に従事した平野屋五兵衛の親類で、薩摩伊作の紙の製造と販売に努め、1828・文政11年～1838・天保9年に6回、大坂と鹿児島間を往復し、藩内を踏査しました。そのときのスケッチを鳥瞰図風にまとめ、そのうちの1枚が当図です。

この図を図1の模式図に対応させると、屋形⑰、⑱を中央に置き、背後は山城で、屋形前の格子状の屋敷を、北東の海上から俯瞰しています。北側は基本的には北外堀㉑までですが、海寄りには北外堀外の都城屋敷と琉球館の一部を載せ、南川は南外堀⑩までで、山寄りは南泉院とその前の大きい通路の一部を載せています。

屋形⑱は周囲を内堀㉒、㉓と、御隅櫓、兵具所の載る石垣で囲み、御楼門㉔、北御門を置き、内部に大規模な建物が建っています。屋形⑰は3つの門と、低い石垣とそれに載る屏に囲まれ、内部には小規模な建物が詰まる様に建っています。厩曲輪は南外堀に向いて門があり、屏の載る石垣で囲まれ、内部は地形の高低に応じた建物が建っていま

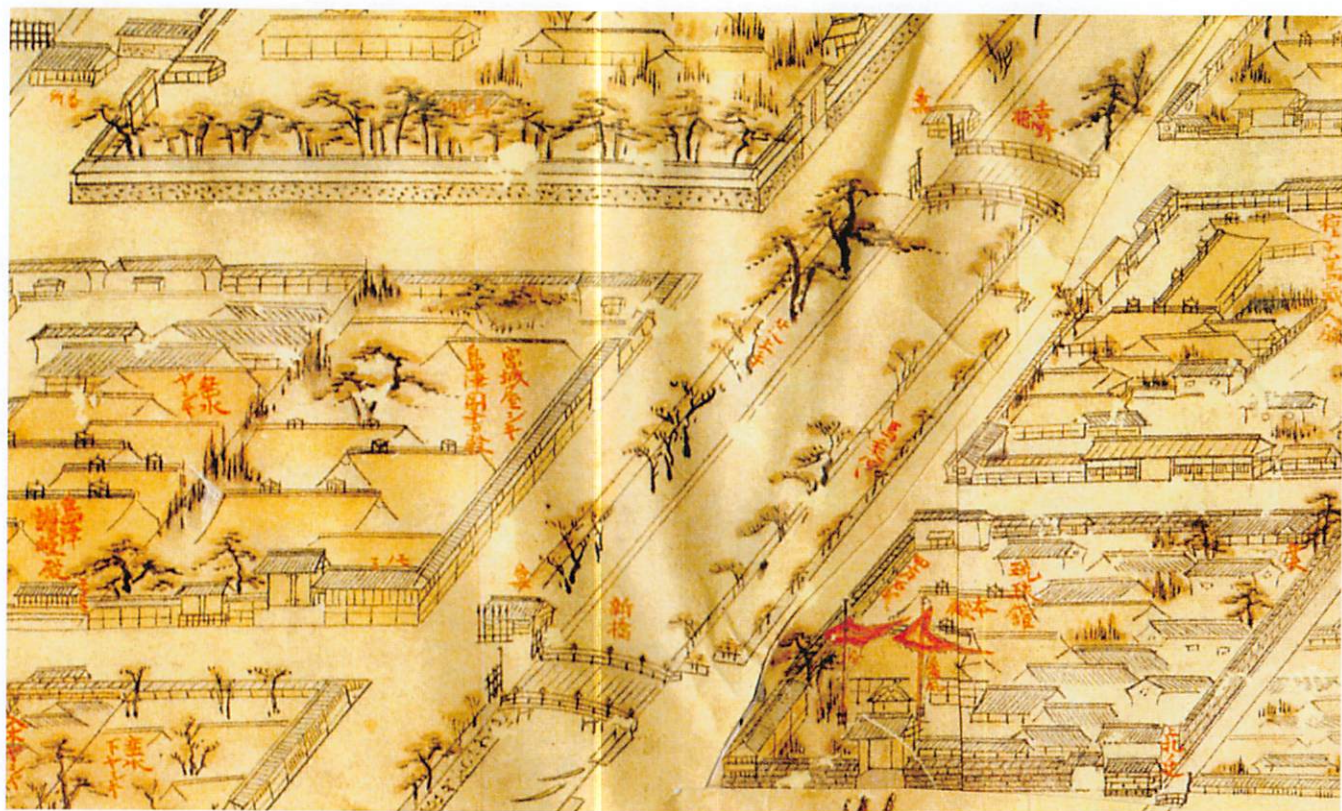


図9 「天保十四年鹿児島城下絵図」(同前) 北外堀部

す。南外堀の奥は南泉院とその囲いがあり、堀の両側には樹木が並び、堀には大手橋が架かっています。北外堀は吉野橋と新橋が架かり、新橋から西は堀の両側には樹木が植えられています。

そして屋形前は北外堀側から南外堀側に向かって順に宮之城屋敷、明地、奉行所、演武館、聖堂等が並び、その東側は入来院家、喜入家、加治木家、小松家等の侍屋敷が並び、名山堀を挟んで、海側は築地になっています。当図の中央は、屋敷周辺部の四角形の格子状の区画を連ねた屋敷群で占められていて整然とした屋並になっていて、鹿児島屋形の前を描いた図として通用しています。なお図5は1756・宝暦6年の屋形前から一切の建物がなくなった様子を描いていたのですが、それから80年前後経た1828・文政11年～1838・天保9年には、1区画を除いて建物が建っているのです。

(2) 1843・天保14年作「天保十四年鹿児島城下絵図」(図8)

続いて、「天保十四年鹿児島城下絵図」を取りあげ、図8とします。当図は鹿児島市立美術館が所蔵する六曲屏風です。これが1935・昭和10年鹿児島市の『薩藩沿革地図』に「天保年間鹿児島城下絵図」として刊行されて、知られ

るようになりました。その後1913・大正2年山下兼秀氏が書写し、郡山公英氏が監修した六曲屏風が作成され、鹿児島県立図書館に所蔵され、ほぼ同時に6枚の紙に書写され、それが黎明館の玉里島津家資料に収蔵されています。更に1980・昭和55年に鹿児島市立美術館所蔵六曲屏風の複製版が『天保十四年鹿児島城下絵図注解』として大江出版社から刊行されました。この注解の執筆者は五味克夫氏です。

当図は南東側の鹿児島湾の上空から城下の上方と下方を俯瞰した図で、その詳細は、前記の五味氏の注解に報告されているので、今回は一般的な解説はその注解に任せて省き、本稿のテーマである鹿児島城の解明に関わる点のみを扱います。先ずは、当然なことですが、この膨大な図の中心は鹿児島城となっていて、山城域の全体が描かれている点が大変な点です。

山城域は、北端の岩崎士番所、南東の大手口大番所と南西の新照院番所で囲まれた範囲で、これを御城山としています。以下当図を、図1の模式図に対応させてみます。山城域では、①、②、③は描かれていますが、④、⑤は明確ではありません。これに対し屋形⑬、⑭とその周辺域では、⑭については内堀⑮、⑯、その堀に沿った石垣等、御楼門⑳、北御門と建物が描かれ、⑬についても屏、門、石垣と建物が描かれており、⑭は「本丸」とされ、⑬は「二之丸」と



図10 「天保末年鹿児島城下絵図」(1843・天保14年頃作)

されていますし、既曲輪②⑤も屏、門、石垣と建物が描かれ、屋形周辺も溝、道路、屏と建物が描かれていて、いずれも詳細ですし、御楼門は枳形を構成していたことも分ります。こうしてみると当時屋形が本丸、二之丸とされていて鹿児島城の中核部分と意識され、屋形の周辺域や山城域は、城としては軽視されていると思わざるをえません。とは言っても、北外堀②⑦と土居②⑧、吉野橋②⑨、新橋③⑩ははっきり描かれ、南外堀は、⑦、⑧、⑨、⑪は触れられていませんが、⑩、⑬と土居⑫は、枳形⑭、俊寛堀⑮、名山堀⑯、築地③と共に詳しく描かれていて、両外堀が鹿児島城の城壁であったことを、城に関心を持つ者ならば理解できたと思われます。

(3) 1843・天保14年作「天保十四年鹿児島城下絵図」(北外堀部・図9)

図8から北外堀を拡大したものを図9とします。図1の模式図に対応させておきます。図9は北外堀②⑦の大半を示しており、右に屋形⑮の北側、内堀②④、御楼門②③と枳形②②、既曲輪②⑤等が見えます。これで南外堀と内堀等の位

置関係を理解できるようにしました。右上に岩崎口③があり、堀の南側沿いに、植栽のある土居があり、堀には吉野橋②⑨と新橋③⑩が架かっています。両橋で土居は切られており、橋の袂には番所が建っています。堀の北側には、まばらに街路樹相当の木々が見え、両橋間では街路樹相当の木々は2列になっていて、新橋から東には木々はありません。新橋から東の堀の南側は石垣になっています。新橋の南側は南からの通路に続いていますが、それ以外は南北の通路とずれています。新橋には擬宝珠の付いた柱が立っています。

(4) 1843・天保14年頃作「天保末年鹿児島城下絵図」(図10)

次は「天保末年鹿児島城下絵図」で、天保末年は1843・天保14年と読めますので、これを1843・天保14年頃に作成された略図とし図10とします。鹿児島県立図書館が所蔵していて、鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(26)『鹿児島(鶴丸)城本丸跡』(1983年刊)に載せられました。

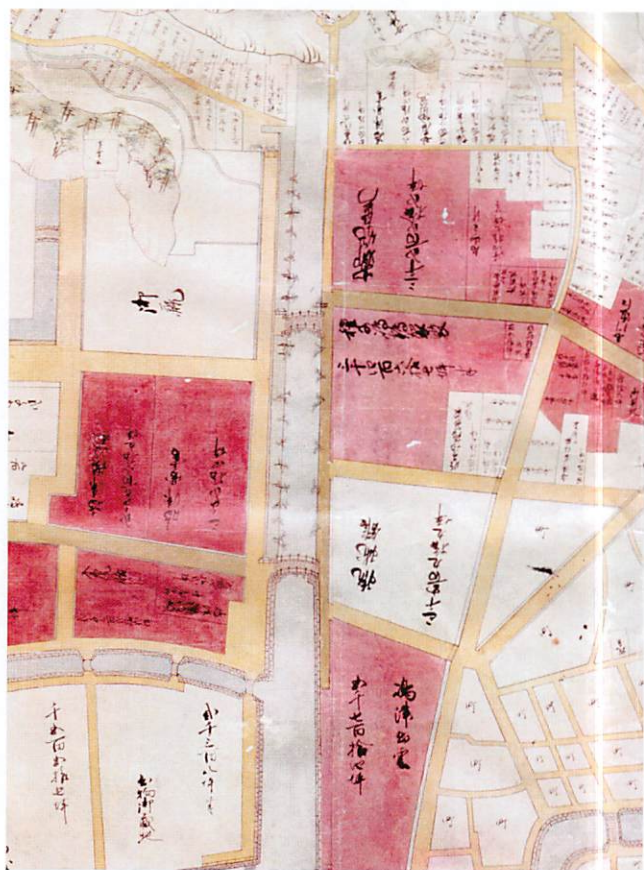


図 11 「安政六年鹿兒島城下絵図」
(1859・安政6年作) 北外堀部

当図は、上級身分者の居住者の屋敷名と寺社名を掲載した略住宅図です。図1の模式図と対応させると、屋敷⑬に本丸、⑰に二之丸と書かれた、その周囲に屋敷名、寺社名が書かれています。本丸は内堀⑳、㉑、㉒で囲まれています。内堀がコの字に本丸を固めており、屋形周辺部の屋敷が、⑰、⑬の前面を固め、山城域の屋敷が⑬の背後を固めており、⑰、⑬の北と南には、北外堀㉓と、南外堀⑩が存在し、⑰、⑬の脇を固めています。本丸二之丸が鹿兒島城の中核であると強く訴え、山城はなだらかな丘で描かれ、⑰、⑬のを背後に控えた格好の構図になっています。

(5) 1859・安政6年作「安政六年鹿兒島城下絵図」(北外堀部図11、山城部図12)

次は「安政六年鹿兒島城下絵図」を取りあげ、図11、12として見ていきます。当図は鹿児島県立図書館が所蔵する、3.5m×4.5mの巨大な絵図で、『旧薩藩御城下絵図』の名称で知られていて、2001年鹿児島県立図書館によって、同名称で52枚の切絵図として刊行され、それを受けて、2004年塩満郁夫氏・友野春久氏『新たな発見に出会う 鹿兒島城下絵図散歩』(高城書房)によって、居住者・居

住地の一覧と共に刊行されました。当図は南を新川、北を妙谷寺、東を東福寺城、西を田上で限り、その地域の屋敷を、「貴間に達し直に仰せ付けられ候場所屋敷」、「貴間に達し屋敷・直に仰せ付けられ候馬場通り」、「本屋敷・自分持高・寺社地」、「士借地」、「外城郷士・座付与力借地」、「座付職人借地」、「人内家来・下人借地」、「町人・門前者・社人借地」、「在郷人借地」の9種に色分けし、主な居住者名と敷地面積を記しています。

「貴間に達し直に仰せ付けられ候」とは、藩主公認を意味し、上級身分者の屋敷や、公官署、公路等で、屋形の周囲とその南北を主にして配置されており、今後の鹿兒島城の全体像検討に向けた素材です。

当図を図1の模式図と対応させると、屋形⑬は「御城」とされ、内部について描がかれたものではなく、内堀㉑と㉒とが描かれただけで、他は描かれませんでした。それに対し北外堀関連㉓、㉔、㉕、㉖は総べて描かれ、南外堀関連⑧、⑨、⑩、⑪、⑫、⑬、⑭、⑮も総べて描かれていました。当図は外堀に強い関心を持っていたのであるといえます。今回は全体を掲載しようとする大幅な縮小になるので、図11として北外堀、図12として山城を選びました。前者は改めて述べることはなく、図9と合わせて、北外堀が400m超の直線水堀で、山麓から海岸まで伸びる強烈さを再確認しえたいと思います。また後者は大手口に続く山中に「城番」や「大番所」系の手口6ヶ所土屋敷が描かれていることに注目したいと思います。

5. 廃城後の鹿兒島城

(1) 1873・明治6年作・成尾常矩「鹿兒島城本丸殿舎配置図」(図13)

次は藩の金山奉行だった成尾常矩氏が1873・明治6年に作成した「鹿兒島城本丸殿舎配置図」を取りあげ、これを図13とします。原図は鹿児島市立美術館と磯尚古集成館が所蔵しており、今回は鹿児島市立美術館所蔵で、鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(26)『鹿兒島(鶴丸)城本丸跡』(1983年刊)に収載されたものを見ていきます。

鹿兒島城本丸は維新以後、1871・明治4年廃藩置県で島津藩第12代藩主忠義が退出、翌1872・明治5年明治天皇の行幸を経て、陸軍の熊本鎮台の分営となって、荒廃が激しくなりました。そこで成尾氏は、本丸の荒廃を嘆き1873・明治6年3月本丸の建物の配置状況を記録することで、鹿兒島城の威容を後代に伝えようと建物配置図を作成しました。作成7ヶ月後、1873・明治6年10月18日本丸

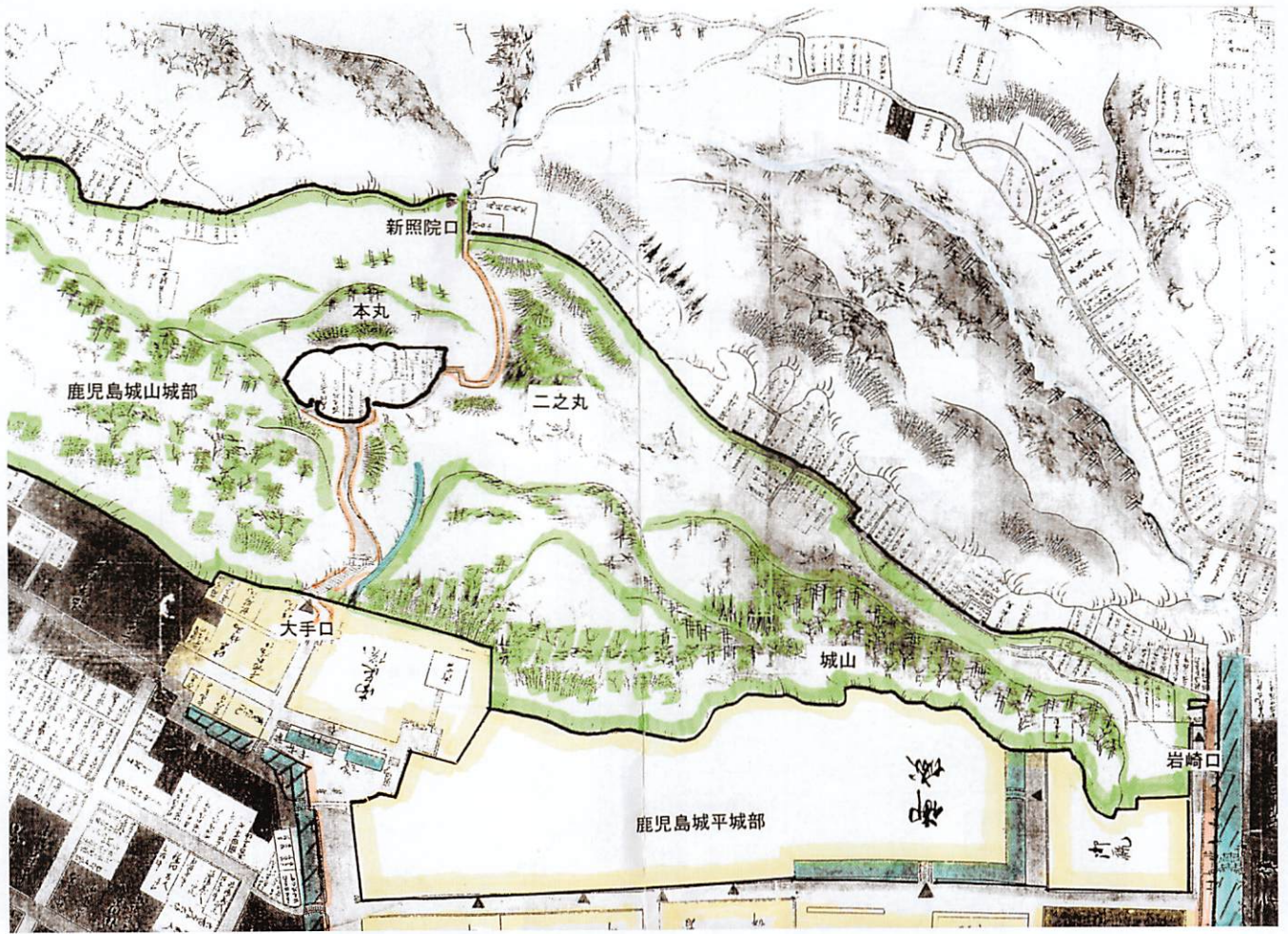


図12 「安政六年鹿児島城下絵図」(1859・安政6年作) 山城部

は焼失してしまうので、本丸の建物の配置は、本丸の唯一の記録となってしまいました。しかし長らく忘れられた後、1978・昭和53年10月～1979・昭和54年12月の鹿児島城本丸の発掘調査で、関係者の探索で当図が目にとり、本丸発掘調査時に、また本丸発掘報告書の作成時に、当図が多大な貢献をすることになりました。その経緯は前記報告書等に記されています。そして更に2016・平成18年以降の本丸調査で活用されているところです。

これからは、鹿児島城の全容解明の視点から、更なる活用が期待されています。

(2) 1873・明治6年作・成尾常矩「鹿児島城屋形及び周辺図」(図14)

続いて成尾常矩氏が1873・明治6年に「鹿児島城本丸殿舎配置図」と共に作成した「鹿児島城屋形及び周辺図」を見ていきます。これは図14です。原図は鹿児島市立美術館所蔵と個人所蔵とがあり、後者に拠ります。

当図は、成尾氏が1873・明治6年3月24日、40年以前

ということは1833・天保4年以前に作成された図をもとに、自分の記憶を整理して「旧御屋形御曲輪の図」とし、子孫に伝えようと清書しましたが、1877・明治10年の西南の役で屋形とその周辺が損傷したので、これを機に再度補い、1878・明治11年5月中旬に書き写したものです。それは成尾氏が、島津氏の家臣達が7百年来受けてきたご主人様の恩を忘れるのではないかと、近年のよろず洋風に傾きがちなこと、長らく伝統とされてきた武家の帯刀が廃刀令で雲行きが怪しくなったこと、藩の垣根がなくなること、城が破却される時期に至ったこと、封建の厳備が昔話となりつつあること、城と城下が商家市街となることを総べて遺憾な風潮と考えたためでした。

当図は、今までの絵図と比べれば、極めて厳格な平面図であり、図15の模式図と対応させると北外堀、南外堀、枳形、屋形とその周辺について今までの絵図にないデータを提供していて、大変有効なものです。

この様に図14は、1833年以降の資料で、藩政期を回顧して描いており、その執筆時期は廃城後ですが、藩政後期

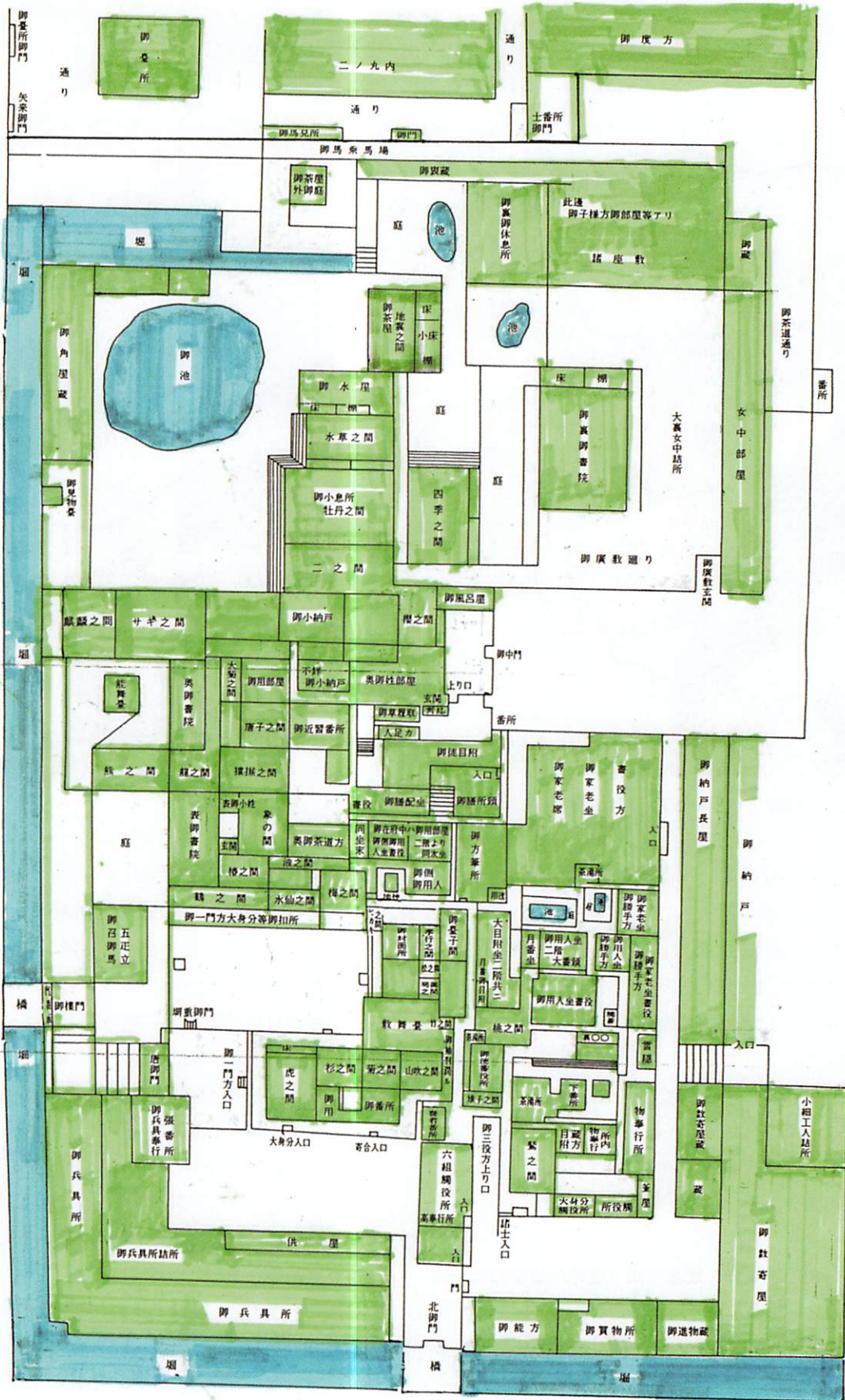


図 13 成尾常矩「鹿兒島城本丸殿舎配置図」(1873・明治6年作)

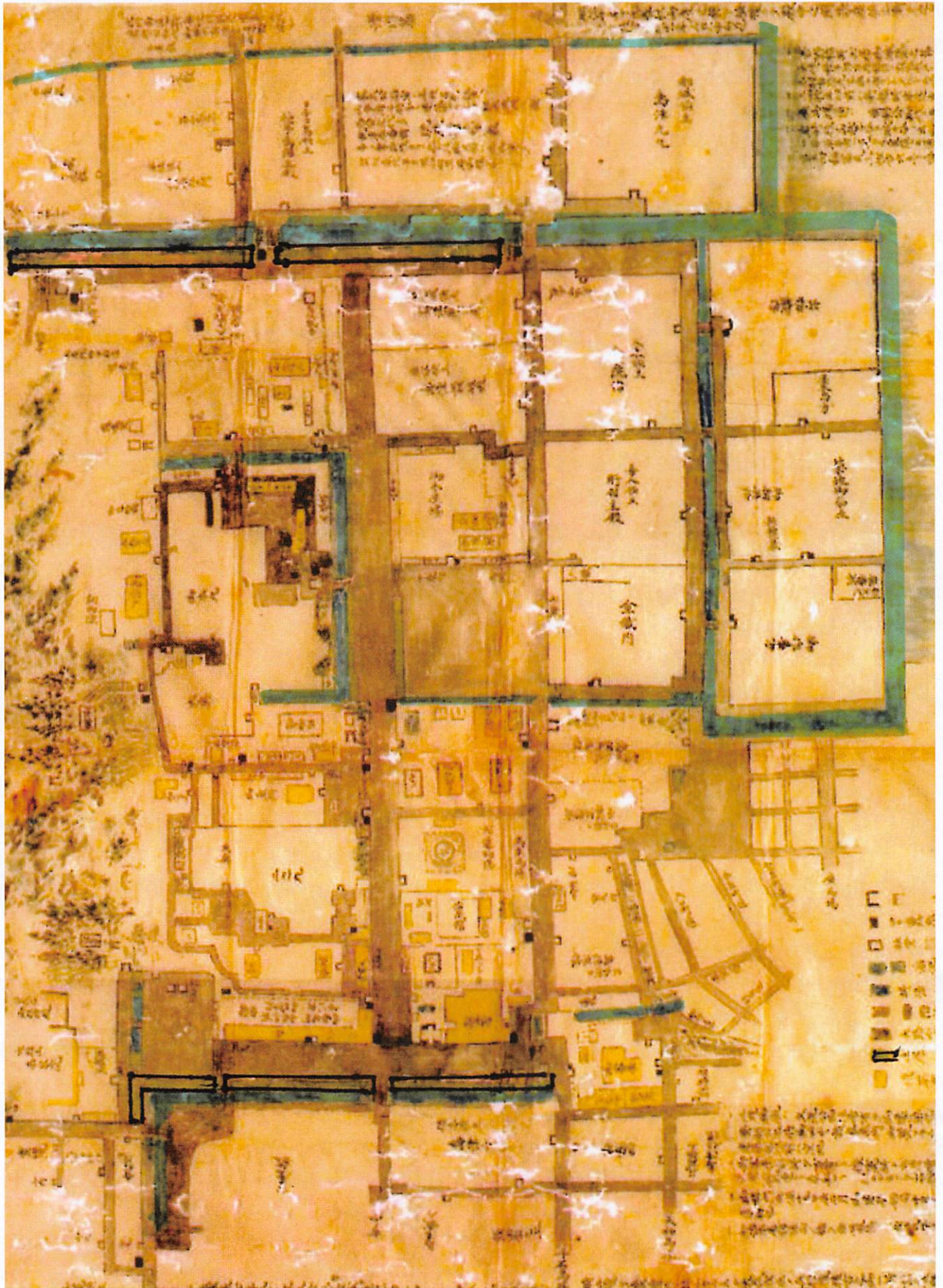


図 14 成尾常矩「鹿児島城屋形及び周辺図」(1873・明治6年作)

の様子を思い出す基盤のうえに完成した図で、鹿児島城の全容解明を目指すにはうってつけの絵図と言えます。

当図については、拙文「史料紹介：成尾常矩「鹿児島市色屋形及び周辺図」」（『鹿児島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告 第13集』掲載、2016年刊）で述べてありますので、重複を避けて詳細はそれに譲ります。

鹿児島城絵図の最後をこのような、島津氏の歴史に心を寄せ、鹿児島城に愛着を持ち、鹿児島城で生活していた人物の作成した絵図で締めることになりました。

6. 鹿児島城の主な歴史と主なパーツーおわりにー

鹿児島城関連絵図は多数知られていますが、今回は県立図書館の協力を得て、

図2 「鹿児島城及び町割図」（1670・寛文10年作）

図3 「元禄九年鹿児島城絵図」（1696・元禄9年作）

図4 「正徳三年鹿児島城下絵図」（1713・正徳3年作）

図5 「薩州屋形之絵図・宝暦六年鹿児島城下絵図」（1756・宝暦6年作）

図6 「文政五年鹿児島城絵図」（1822・文政5年作）

図7 高木善助「城山南面屋形前之図」（『紀行篇画帖』1828・文政11年～1838・天保9年来鹿）

図8 「天保十四年鹿児島城下絵図」（1843・天保14年作、1913・大正2年山下兼秀写）

図10 「天保末年鹿児島城下絵図」（1843・天保14年頃作）

図11 「安政六年鹿児島城下絵図」（1859・安政6年作）

図13 成尾常矩「鹿児島城本丸殿舎配置図」（1873・明治6年作）

図14 成尾常矩「鹿児島城屋形及び周辺図」（1873・明治6年作）

の11点を主として見てきました。関連して述べたことも含め、整理しておきます。

まずは鹿児島城の築城です。戦国島津氏の名声を引き継ぎ、三殿体制を克服し、首脳陣として協調し、上山城と言う中世山城を中心に据えて、徳川家康、加藤清正ら上方勢の攻撃を防ぎました。実際を言う、山城には手を付けず、屋形を増築するという築城でした。この山城は、鹿児島城の堅固さをアピールしました。

屋形は、島津氏的首脳陣が早くから高石垣と水堀で際立たせることに合意し、山城を背景に、主郭の前面を高石垣と水堀で囲みました。更に屋形は、その周辺部と一体化し、縦横に通路を通じ、格子状の整然とした区画を持ちました。全国でこれだけ整った四角形の屋敷区画を持つ城はありま

せん。その区画は山城麓から海岸まで続き、景観の形成、国持大名格の向上、城の安全性確保に効果がありました。

そして島津氏は、幕府の風下に立つのを嫌い、鹿児島城の範囲を限定的にし、他の城であれば城内にする範囲も城内とはせず、本丸と二之丸の周辺は三ノ丸とする通例も無視しました。

しかし時流を反映し、山城の本丸、二之丸の公称は、1787・天明7年第8代藩主重豪が屋形に二之丸殿舎の造営を命じ、1792・寛政4年そこに移るまで山城にありました。

屋形の正門は、大手門かそれに準じた門が多かったのですが、鹿児島城では山城の大手を維持し続け、当時の屋形では、御楼門の名前にしています。この正門は、城外からの来客には御楼門を潜らせ、右折させ、更に左折させて、唐御門を通らせており、二つの折れを持つ枡形門で、厳重な備えをしていたのです。

鹿児島城から西田橋へ向う千石馬場通への入口付近は枡形と呼ばれており、ここは山城への入口であり、古くからの枡形が想定されています。その後も西田橋から、枡形に抜ける通路が、鹿児島城にとっては最も重視されたルートでした。

特に強調してきたことでもありますが、鹿児島城関連絵図類の総てに共通するものに2本の外堀の存在がありました。2本とも山城側から、海側に向かっており、土居も存在していました。北外堀には吉野橋、新橋が、南外堀には大手橋、山下橋が架かっており、新橋は、西田橋と並び鹿児島城や鹿児島城下の南北の「要口」で、新橋には枡形番所もあり、重要な橋でした。ここで、参考に以下の4点の図を付け加え、南外堀、北外堀の様子を思い起こす手懸りにしていただきたいと思います。

○「南泉院図」（『薩摩風土記』（1821・文政4年刊、鹿児島市史Ⅲ））（図15）

○「琉球館、都之城屋敷図」（『鹿児島振り』（1838・天保9年刊、日本庶民生活史資料））（図16）

○「北外堀の断面模式図」（黎明会2017年3月14日配付資料）（図17）

○「南外堀の断面模式図」（黎明会2017年3月14日配付資料）（図18）

図15は、南泉院が整備され、院の前が広場になった時期に広場南側に植栽帯と水堀があり、それが南泉院前で、南方向に曲がっている様子で、この植栽帯が土居で、水堀

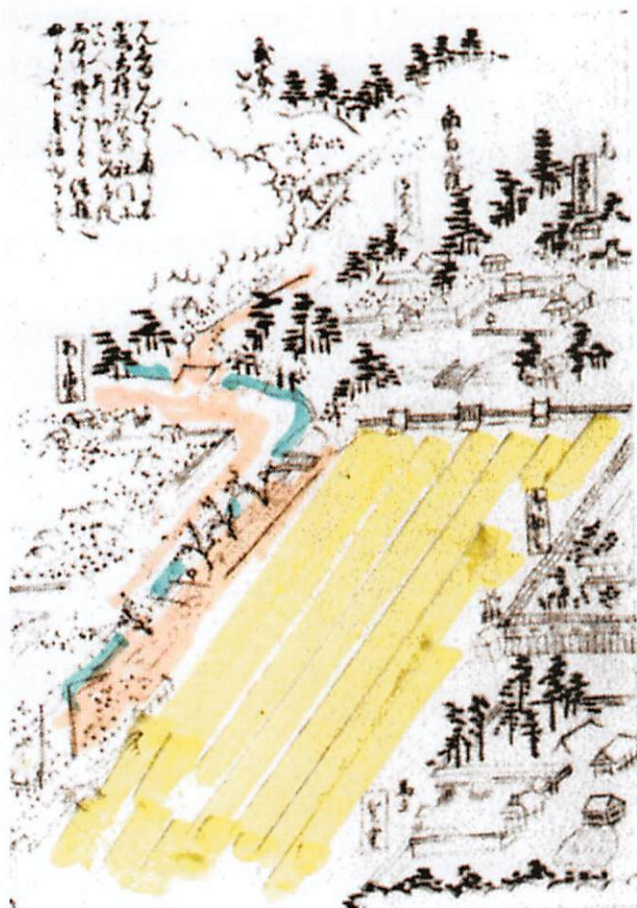


図 15 「南泉院図」(『薩摩風土記』
(1821・文政4年刊, 鹿児島市史Ⅲ))



図 16 「琉球館, 都之城屋敷図」
(『鹿児島振り』(1838・天保9年刊, 日本庶民生活史資料))

城内

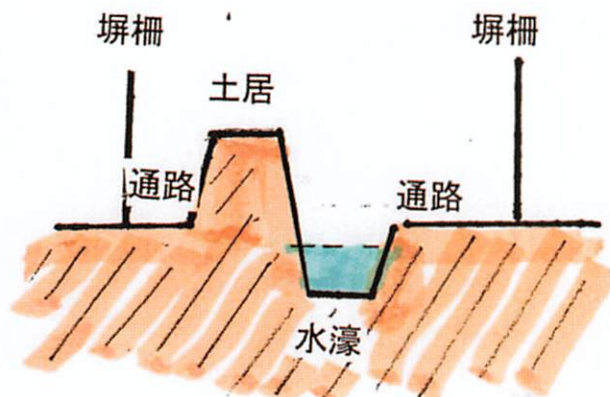


図 17 「北外堀の断面模式図」
(黎明会 2017 年 3 月 14 日配付資料)

城内

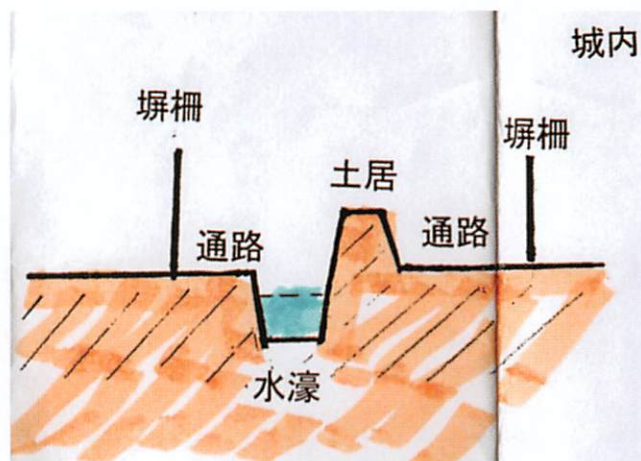


図 18 「南外堀の断面模式図」
(黎明会 2017 年 3 月 14 日配付資料)

が南外堀の図1に⑧と⑩です。左上付近は大手です。図16は手前が宮之城屋敷、その向かい側が琉球館で、左側に新橋の石製の高欄に「新橋」と書かれているようです、新橋は北外堀に架かっています。

外堀は、城側からみて堀の内側に土居を設け、堀と土居で守備を固めるものでした。図17に北外堀の断面模式図を、図18に南外堀の断面模式図を掲載しておきました。なお、北外堀の北側には、滑川がほぼ並行して通じていました。

ところで、山城と海岸に挟まれ、この外堀で囲まれた範

囲が、本来の鹿児島城と考えられます。これほど重要な外堀でしたが、維新前後に消滅してしまい、今では忘れられてしまいました。他の鹿児島城の構成要素と合わせて、この外堀も古絵図等の助けを得て、早く本当の姿をご理解いただくよう願っています。

今回も、鹿児島城の調査、研究の基礎的な段階でひとまず幕とさせていただきます。

終りになってしまいましたが、ご支援、ご協力いただいた諸機関と関係者の皆様に感謝しています。